

「俺も父親だから」

小竹 理央

登場人物

橋田	友彦	(49)	(30)	(17)	会社員。
橋田	由美	(49)	(30)	(17)	専業主婦。友彦の妻。
橋田	美香	(16)	高校生。	友彦の娘。	
橋田	歩	(14)	中学生。	友彦の息子。	
橋田	宗次	(50)	会社員。	友彦の父。	
橋田	頼子	(48)	専業主婦。	友彦の母。	
橋田	健太	(13)	中学生。	友彦の弟。	
北村	恭一郎	(43)	会社員。	友彦の上司。	
井上	太一	(24)	会社員。	友彦の部下。	
柏木	良太	(17)	高校生。	友彦の親友。	
竹中	豊	(38)	友彦の担任。		
由美の友達	1				
由美の友達	2				
会社の役員	1				
会社の役員	2				

○友彦の家・友彦の部屋・（朝）

2024年

橋田友彦（49）、スマホのアラーム音で目を覚ます。

友彦「はあ…6時か」

○同・リビング・（朝）

友彦、部屋から出てくる。

橋田由美（49）、台所で料理をしている。

由美「美香、歩！もう朝よ。早く起きなさい！」「

橋田美香（16）、眠そうに部屋から出てくる。

美香「お母さん！今日朝から部活だって言ってたよね？なんで早く起こしてくれなかったの？」

由美「美香、お母さんにその態度はないでしょ！歩ー！早く起きなさい！」

橋田歩（14）、不機嫌そうに部屋から出てきて洗面所に向かう。

美香「歩。洗面所あたしが先使うから！」

歩「俺が先だから俺が使うし。早いもん勝ちですー」

美香「はー？あんた、お腹から出てくるのは後だったくせになまいきな…」

美香と歩が言い争っている。

友彦、テレビを見ながら朝食を食べている。

由美「ちよつと二人ともそんなことで喧嘩しないの。お父さんから二人に言うて？お父さん？聞ってる？」

友彦「ん？…ああ、そうだな」

由美「もう」

友彦、朝食を食べきれないまま立ち上がる。

○マンションの廊下・（朝）

友彦、家の扉を閉めて、

友彦「はあ。（息を吸い）…よし」

と気合を入れて歩き出す。

○会社・（夕）

北村恭一郎（43）と友彦がいる。

井上太一（24）、眠たそうにデスクに座っている。

北村「なんでそこを間違えるんだよ。発注、間違えんのこれで何回目だよ」

井上、ちらちらと様子を見ている。

友彦「申し訳ございません」

北村「謝ったらそれで済むと思ったら大間違いだぞ。いいか、今度こそよく聞け。

50手前にもなってこんなところでミスしてるから上に上がれないんだよ」

友彦「…はい」

北村「はいじゃねえよ。はいじゃ。せっかく課長にしようと思ってたのに。まったく、次間違ったらその時は許さないからな」

友彦「…はい。あ、いいえ、ではなく、あの、わかりました」

北村「あと、頼んでた案件の人員確保と見積もり、今日中だかな」

友彦「はい、わかってます」

北村「本当にわかってるときにしかわかってるって言えないこと、わかってんのか？しつかりしろよ？」

北村、友彦の肩にわざとぶつかる。

友彦M「はあ。これも家族のため、家族のため、家族のため…（息を吸い）…よし」

友彦、井上のところに行く。

井上、パソコンでゲームしているが急いで画面を切り替える。

友彦「ちょっといいかな、井上君。あの、発注日時の入力ミスが…」

井上「部長に言われてたのその件っすよね？すんません。次、気を付けます！」

友彦「うん…あ、あとの間お願いした資料作成いつ頃終わりそうかな？」

井上「あー。今日と明日は無理ですね…。他

の仕事立て込んでるんで。あ、定時な
んで先帰ります。おつかれた」

井上、出口に向かう。友彦、何か言い
たげに井上の姿を目で追う。

× × ×

22時

友彦、デスクで作業をしている。

北村、友彦のデスクに来る。

北村「橋田」

友彦「北村部長、はい、なんででしょう」

北村「今日急遽、来月に予定していた案件を
前倒しにすることが決定したんだけど、
明日、幹部向けに部の戦略発表するか
ら」

友彦「ですが…そんな急に…」

北村「明日までに発表資料と原稿、用意でき
るか？」

友彦「明日までって…もうこんな時間ですし
…」

北村「この前のミスを取り返すチャンスだ
ろ？これが成功すれば課長への昇格も
近くなる」

友彦「いえ、でも…」

北村「やるのか、やらないのか。どっちなん
だよ？」

友彦「…（息を大きく吸って）やります」

北村「ふん。それじゃ、あと頼んだぞ」

北村、出口に向かう。

○友彦の家・リビング・（夜）

友彦、リビングに入り、荷物を置く。

由美、ダイニングテーブルに座ってい
る。

由美「お父さんおかえりなさい。ねえ、さっ
き思いついたんだけど、お父さん課長
になったらハワイに行くのはどう？き
っと楽しいと思うの」

友彦M「この状況、しばらく課長になれそう
もないとは口が裂けても言えない」

友彦「仕事忙しいからハワイはどうか～」

美香、歩がテレビの前にいる。

美香「歩！リモコン勝手に取らないで！」

歩「やだ」

美香「くだらないアニメなんか後で見ればいい

いでしょ。私はコンサートの生中継見

たいつつてんの！」

歩「ちよつと先に生まれたからって何でも思

い通りにできると思うなよな」

美香「あーマジで無理。お母さん、あたしこ

いつとは同じ家で生きていけない。出

てく！」

歩「“こいつ”も“そいつ”とは一緒に暮ら

せないのです、好きにどうぞ！」

由美「もう美香！たまには歩に譲ってあげな

さい。ほら、歩もお姉ちゃんに謝りな

さい」

歩「どうもすみませんでしたー」

美香「ほんつと信じらんない。もういい」

美香、自分の部屋に戻る。

由美「美香：お父さん、お父さんから美香の
話聞いてあげて頂戴よ」

友彦「え？：ああ、うん、まあ、明日聞くよ」

由美「明日じゃなくて、今聞いてほしいの：」

お父さんもういいから。私が聞く。美

香―？」

由美、美香の部屋に入る。

友彦「今日は唐揚げか：」

友彦、用意してある料理に手を付けず、
ラップをかけて台所に持っていく。

○同・洗面所・（夜）

友彦、ドライヤーをかけている。

歩、洗面所にやってくる。

友彦「：はあ」

友彦、天井の一点を見つめる。

歩「お父さん、会社でなんかあった？」

友彦「ん？：いやあ？普段通り、別に、何も

ないよ。心配しなくて大丈夫」

歩「あのさ、お父さんさあ：」

友彦「ん？」

歩「まあいいや。何でもない」

歩、歯を磨く。

友彦、ドライヤーで髪を乾かす。

○同・友彦の部屋・（夜）

友彦、部屋のドアを閉める。

バッグの中身を取り出し、机に座る。

仕事を開始すると視界がぼやける。

友彦M「ああ。今寝たら：今寝たらおしまい

だ。明日のプレゼン、間に合わない：

ん？：なんだ？」

× × ×

回想

北村「なんでそこを間違えるんだよ」

× × ×

回想

由美「お父さんから二人に言って？」

× × ×

回想

歩「お父さん、会社でなんかあった？」

× × ×

妄想

由美、美香、歩、北村、井上が机に突
つ伏した友彦に向かって様々な言葉を
浴びせている。

友彦M「もう、無理」

○同・友彦の部屋・（朝）

1992年

友彦（17）、目覚まし時計の音で目
を覚ます。

友彦M「ん：6時か：あれ、プレゼン！まず
い！やっちゃまった！」

友彦、辺りを見回しスマホを探す。

友彦「あれ、スマホどこだ？」

○同・リビング・（朝）

橋田頼子（48）、料理を作っている。

友彦、頼子の背後から近づく。

友彦「由美、俺のスマホ知らないか？」

頼子、振り返る。

頼子「ん？どうしたの友彦？由美ってだれ？」

友彦「わぁ！誰！？」

頼子「なーに、寝ぼけてんの？早く準備しな

いと学校遅れるわよ」

友彦M「ん？え？母さん！？でも、なんだか

若々しい：」

友彦「学校じゃなくて会社だろう。俺ももう

子供じゃな：」

橋田健太（13）、友彦にぶつかるが

気にせず冷蔵庫に向かう。

友彦「歩：ぶつかったときはちゃんと謝れ」

健太「兄ちゃん、頭でも打ったの？」

友彦M「ん？誰だ：もしかして健太？え？：

そうか、なるほど。これは夢だな」

友彦、トイレに向かう。

健太、友彦を追い抜かしてトイレにつ

く。

健太「俺の方が先」

友彦「ああ、健太。使い終わったら教えてくれ」

健太「兄ちゃん落ち着きすぎて気持ち悪い」

頼子「ケンちゃん、そんなこと言わないの。」

友彦、顔洗って、歯磨きなさい」

友彦「はい」

友彦M「妙に現実味のある夢だな。もう少し寝ておくか」

○同・洗面所・（朝）

友彦、顔を洗い、顔を上げる。

友彦「へ：ん？ん？：俺、とんでもなく若返ってないか？」

友彦M「何だ、何だ？何なんだこれ。大体この顔だと高校生？くらいか？」

友彦、自分の顔をつねる。

友彦「いたたたた。痛い。ということとはつまり夢じゃない：俺、本当に高校生になった！？」

○ 駅のホーム・（朝）

友彦、電車を待っている。

友彦、電車が来て制服姿が電車の窓に映る。

友彦 M 「あれ、学校に行くならホーム反対か」

友彦、後ろに並んでいる乗客たちに押し飛ばされる。

友彦 「あたたたた」

○ 電車の中・（朝）

友彦、座席に座っている。乗客が持っている新聞に 1992 年と記載がある。

友彦 M 「つまり、俺は寝て起きたら高校時代にタイムスリップした。いやいや、現実に考えておかしいだろう。夢だとしたら、いつか覚めて元の世界に戻るはず。それとも一生このまま……？」

友彦の隣の乗客がコーヒーを友彦にこぼす。

友彦 「あちっ！」

乗客「すみません」

友彦「いえいえ、気にしないでください」

友彦M「どう考えてもこれは夢じゃない。

ん？…ということはつまり会社もプレ
ゼンもちやら？それに家族の問題も今
は考えなくていい…だとしたら」

友彦「高校生って最高だなあ！」

乗客、不信そうな目で見ている。友彦、
気まずそうにする。

○学校・校門前・（朝）

友彦が立っている。

友彦「懐かしい。高校来るのなんて何年ぶり
だ？」

柏木良太（17）、友彦の背中を軽く
押す。

柏木「ウェーイ！トモちゃん。校門前でなに
突っ立ってんだよっ！」

友彦「お、柏木！久しぶりだなあ！」

柏木「昨日も野球したろ？なんだよ、そのノリ」

友彦「お、おう。そうだった、な？」

友彦M「おっとっと。そうだった、俺は今高校2年生。この事実は忘れちゃまずい」

朝のチャイムが鳴る。

柏木「やっべ、朝のチャイム鳴った！早くしろ、トモちゃん」

友彦「お、おう！」

友彦と柏木、校舎に向かって走る。

友彦M「二回目の高校生活。俺、今幸せなのかも！」

○同・教室前・（朝）

友彦、鏡を見つけて自分の姿を見る。

友彦「ん？もしかして17の俺結構イケてるんじゃないか？」

友彦が自分の姿に見とれているところに担任・竹中豊（38）が来る。

竹中「橋田、早く教室入れ。朝礼始まるぞ」

友彦M「げっ。担任竹中かぁ。あの時、苦手だったんだよな、そういえば」

○同・教室

昼休み開始を知らせるチャイムが鳴る。

友彦の机に柏木がやって来る。

柏木「つーか明日の小テスト全然間に合わね

え」

友彦「小テスト？」

柏木「数学の！小テスト！トモちゃん忘れて

た？トモちゃんのおかげで最下位回避

できつかもな、今回」

友彦M「そうか、テストがあるのか。高校生

もそう甘くはないな」

柏木「あ、そうだ。今週末、野球の試合ある

けど、行くよな？」

友彦「いや、俺は、ゴルフの方が好きだから」

柏木「え？」

友彦「ん？」

柏木「いやいや、そんなおっさんみたいな趣味だったっけか？」

友彦M「おっさんって！？20年後にはそっちから先に誘ってくるのに」

友彦「そ、そんな、おっさんみたいな趣味あるわけないだろ。冗談、冗談！」

柏木「つだよな？やっぱ友彦は俺が認めた男だ！」

由美（17）、教室に入ってくる。

柏木「あ、由美ちゃんだ。かわいい」

友彦、柏木が見ている方向を向く。

由美、教科書を持って教室を見渡している。教室内の男子が由美に注目している。

友彦M「お…高校生の由美だ。すごい美人…」
由美、友彦を見つけると嬉しそうに向かってくる。

友彦「あ、由美、どうした？」

由美「え？下の名前？初めて呼んでくれた…
いつも苗字呼びなのに」

柏木「（小声）おい、抜け駆けは無しだろ、

トモちゃん」

友彦「お、おう。それで何の用？」

由美「これ、昨日貸してくれた教科書。返す」

友彦「そうか。わかった」

由美「それじゃ：私：行くね。またね！」

友彦「うん」

由美、教室を出ていく。

柏木「おーい、いつの間に距離詰めたんだよ。

羨ましい：俺も由美ちゃんと話たい」

友彦「まあ、柏木も、がんばれ」

友彦M「まあ、将来由美は俺と結婚するけど」

○友彦の家・リビング・（夜）

友彦、リビングに入ってくる。

友彦「ただいまー」

頼子、料理を作っている。

頼子「友彦、おかえりなさい。今日は学校ど

うだった？」

友彦「うーん、何もかも新鮮なような、懐かしいような、不思議な感じかな」

頼子、おもむろに友彦のおでこを触る。

友彦「ん、なに？母さん」

頼子「こんなに受け答えするの初めじゃない？熱でもあるのかしら？」

友彦M「そうか、あの時そんなにそっけなかったっけか」

頼子「うん。大丈夫そう。ご飯出来てるわよ」

友彦「はい」

友彦、ダイニングテーブルに座る。

友彦「いただきます」

友彦、料理を口に運ぶ。

友彦M「ん…しょっぱい…母さんの味付け濃いなあ」

頼子「どう？」

友彦「（苦笑いで）うん…美味しい」

頼子「そう？良かった。また今度作るわね」

友彦「…う、うん」

友彦M「由美の作るご飯は味付けがちょうど
良くて美味いんだよな！」

○同・友彦の部屋・（夜）

友彦、勉強している。

隣の部屋から健太の歌声が聞こえてくる。

友彦「うるさいな、健太」

○同・健太の部屋・（夜）

健太、リモコンをマイク代わりにして
米米C L U Bの“君がいるだけで”を
歌っている。

友彦、部屋に入ってくる。

友彦「健太、テスト勉強の邪魔になるから歌
うのはやめなさい」

健太「は？親父みたいに説教すんじゃねえよ。
兄ちゃんも大音量で歌ってるくせに」

友彦「俺が歌ってる？へえ、それは悪かった。
あ、でも、兄ちゃんの邪魔なことには

変わらないから、うるさくしないでくれ：よな？」

健太「はあ。わかったよ：」

友彦、部屋を出ていく。

○同・廊下・（夜）

友彦、ぶつぶつ文句を言いながら健太の部屋から出てくる。

橋田宗次（50）、仕事から帰って来る。

宗次「ただいま」

友彦「お、お父さん。お帰り」

宗次と友彦はお互い見つめ合う。

友彦M「父さんだ。高校生になってから初めて見た気がする。疲れ切った目と哀愁漂うスーツ姿。ほのかに香るたばこの臭い。これは間違いなく俺の父さんだ」

宗次「友彦、夜遅いから早く寝なさい」

友彦「はい：今11時か。父さんのご飯は：」

宗次、自分の部屋に入る。

友彦「この時間に帰ってくるってことは今日、
残業か」

○同・リビング・（朝）

宗次、ダイニングテーブルに座って朝食を食べながら新聞を読んでいる。

友彦、反対側に座って朝食を食べている。

友彦M「一度父親を経験してから父親を見るのは変な感じがする。朝は部屋から出てきておはようだけ言って、それ以外何も言わないし、新聞読んで朝ごはんを食べているが無表情。何を考えているのか全く読めない」

宗次、朝ごはんを食べきらないまま席を立つ。

友彦「父さん、玉子焼き食べないの？」

宗次「ああ。食べていいぞ」

宗次、バッグを持ち、ジャケットを着る。

友彦「じゃあ、いただきます」

宗次「行ってきます」

友彦「行ってらっしゃい」

宗次、家から出ていく。

友彦「俺もああいう風に見えてるのか？」

○電車・（朝）

友彦、座席に座り手のひらサイズの手帳にタイトル（タイムスリップ日記）を書き込んでいる。

友彦M「俺はこの不思議な体験を日記に残しておくことにした。もしかすると、将来、この体験を小説にでもして大儲けできるかもしれない」

友彦、1ページ目を開く。

電車が揺れてメモに余計な線が入る。

友彦「あっちゃー」

○学校・調理室

生徒たちが調理をしている。由美と由美の友達はスイーツ作りをしている。

由美「小麦粉150グラムと、砂糖：」

友達1、友達2が二人で話している。

友達1「本当に？それ確かな情報？」

友達2「本当だって。陸上部の3年の先輩は

それで付き合ってたって言ってた！」

友達1「うそ！なら本当じゃない！？私はど

うしよっかな？」

由美、二人のところに行く。

由美「二人とも盛り上がってどうしたの？」

友達1「あのね、3年の先輩の話によると、

調理実習で作った料理を好きな人に渡

すと恋が実るらしいんだよ」

由美「それ本当？」

友達2「直接聞いたから当たってると思う」

由美「へー。恋が実る：か」

○同・廊下

由美、作ったカップケーキを手にとって廊下を歩いている。

友彦、柏木と一緒に歩いている。

由美「あ、橋田くん。ちよつといいかな？」

柏木「由美ちゃんだ。トモちゃんばかりい

いなあゝ」

友彦「うん、どうした？」

由美「ちよつと来てくれる？」

○同・中庭

由美と友彦、ベンチに座っている。

由美「これ、今日調理実習で作ったの。橋田

くんに食べてほしくて」

友彦「俺に？いいの？じゃあ、遠慮なく。頂

きます」

友彦、カップケーキを食べる。

友彦M「ああ。美味い！！これこれ。俺が求

めていた味。甘すぎないところが良い

んだよな…」

由美「どう、かな？」

友彦「やっぱ美味いわ。由美の料理」

由美「えっと：私の手料理食べるのは初めてだよね：？」

友彦「ふっいやいや。あ、いや？そうじゃないくて、そうそう、初めて、初めて。」

由美「そ、そうだよね！でも良かったー。こんなに喜んでくれて。渡す時すっごい緊張したあ」

友彦M「俺がおいしいと言うだけでこんなに嬉しそう。そういえば元の世界では久しく美味しいうて伝えていなかったな」

由美「じゃあ、私、もう行くね」

友彦「うん。また」

由美、手を小さく振りながら去る。友彦は日記を取り出し、書き込む。

友彦「由美が作る料理は美味い。美味い時は美味いと伝えるべし」

○同・リビング・（夜）

友彦、外から帰って来る。

友彦「ただいま」

頼子が料理をテーブルに運んでいる。

友彦と健太が椅子に座る。

頼子「さ、二人とも、ご飯食べていいわよー」

友彦「今日、父さんは？」

頼子「お父さんは仕事で遅くなるって」

友彦「そっか」

友彦M「また残業か。北村さんみたいな上司

とか、井上みたいな部下が父さんにも

いるのかな」

宗次、帰って来る。

宗次「ただいま」

友彦「おかえり、父さん」

頼子「あら、お父さん、意外と早かったのね」

宗次「まだ仕事片付いてないから、夕飯食べ

たら再開するよ。はあ」

宗次、天井の一点を見つめる。

友彦M「あの雰囲気は会社で嫌なことがあつ

たに違いない」

宗次、ダイニングテーブルに座る。

宗次「頂きます…」

友彦「…父さん、会社で何かあった？もしかしたら相談に乗れるかもしれない」

宗次「…いや、別に何もない。大丈夫だ。友彦、俺の心配はいいから、中間テストの勉強しかりするんだぞ」

友彦M「嘘だ。本当は嫌なことがあったはすだ。けど、言ってくれないと助けられない」

友彦「わかった。だけど、何かあったら何でも言って」

○同・友彦の部屋・（夜）

友彦、日記を書いている。

友彦「俺は“大丈夫”じゃなくて、“大丈夫じゃない”って言ってくれた方が嬉しいのに。ん、そういえばあの時…」

× × ×

回想

歩「お父さん、会社でなんかあった？」

友彦「ん？…いやあ？普段通り、別に、何も

ないよ。心配しなくて大丈夫」

× × ×

友彦「俺も同じこと、歩に言ってたな」

○学校・教室

担任・竹中が黒板に数式を書いている。

友彦と柏木、ウトウトしながら授業を受けている。

竹中「式の因数分解にはまず共通因数をくくり出すことが…」

友彦M「眠い。とてつもなく眠い。会社で仕事をしている時の何倍も眠い。まあ、柏木も眠そうにしているし、一回の授業寝たって大丈夫か」

竹中「橋田、柏木！」

友彦「はいっ」

竹中「授業中に寝るってことは余裕で解けるってことだよな？前出てこの問題解いてみる」

友彦M「やられた：これだから竹中は嫌なんだよ」

友彦と柏木、黒板の前に行く。

友彦M「30年以上前に習った数学の知識は俺の中で既に0に等しかった。そして当然、柏木にも授業中に寝ていられる程の余裕と知識は無かった」

× × ×

友彦と柏木、生徒の方に体を向けて俯いている。

竹中、二人の隣に立っている。

竹中「いいか、こいつらみたいになんたくなきゃ授業しつかり聞いとけよ。ったく。中間試験もうすぐだぞ。ちゃんと話聞いとけ」

友彦・柏木「はい」

友彦と柏木、座席に戻る。

友彦M「正直、高校生は社会人より楽だと思っていたが、実は同じくらい大変かもしれない」

○同・校庭

友彦と柏木を含めた学生たちが体育の授業でサッカーをしている。

友彦「柏木、ナイス！」

柏木「トモちゃん、頼んだ！」

友彦、柏木からもらったボールを蹴つて、ゴールが決まる。

柏木「トモちゃん流石！俺が認めた男！」

友彦「ありがとう、柏木！」

友彦M「久しぶりの体育。これぞ青春って感じ。しかも若いころの俺はかなり運動神経が良い。クラスの女子も心なしに注目している気がする。だからといって、大人になって何の役にも立たなかったが」

柏木「トモちゃん、ボール！」

友彦M「ん？」

友彦の頭にボールが当たる。

○同・保健室

友彦、柏木に支えられてやって来る。

友彦M「調子に乗ったバチが当たった。いく

ら若くてもボールが当たると痛い」

柏木「トモちゃん大丈夫か？」

友彦「おう、ありがとな」

由美、ベッドに座っている。

友彦「由美？」

由美「橋田くん！？血、出てるよ？大丈夫？」

友彦「俺は大したことないから。それより由

美は？体調悪い？」

由美「私は貧血でちよつと…」

友彦「え、大丈夫か？もう少し休んだ方が…」

柏木「それじゃ俺、授業戻るわ。二人ともお

大事に」

友彦と由美、柏木を気にせず話をする。

柏木、悔しそうに保健室を出る。

○同・教室・（夕）

教壇に竹中が立っている。友彦と柏木、
帰る準備をしながら竹中の話を聞いて
いる。

竹中「それじゃこれで今日の連絡事項以上だ。
気を付けて帰れよー」

生徒たち、帰ろうとする。

竹中「あ、そうだ。数学の出題範囲が変わっ
たこと言い忘れてた」

柏木「えー？今ー？」

竹中「150ページまでだったのが、170
ページまでに変わったから、しっかり
勉強して来い」

柏木「（織田裕二風に）ずっちーな！」

生徒たち、不満をつぶやいている。

友彦M「この状況、なんだか身に覚えがある」

× × ×

回想

北村「明日までに発表資料と原稿、用意でき
るか？」

友彦「明日までって：もうこんな時間ですし

：」

× × ×

友彦、勢いよく立ち上がり、生徒が注目する。

友彦「竹中先生！テスト三日前に範囲の変更を伝えるのはどうなんでしょうか？先生にとってはたかが1、2問増えるだけですよ。でも我々生徒にとって、対象は20ページ全てです。それを今になって言うのは、少々ずるいと思います」

友彦M「あれ、まずい、つい口走ってしまった。もしや逆鱗に触れた？親の呼び出し確定か？ああ、視線が痛い」

竹中「橋田。先生にその口の利き方は何だ？これは教員同士で決めたことだ。：だから、今日他の先生と話し合って、調整する」

友彦「え？：成功：した？」

竹中「さあ、帰った、帰った」

柏木「トモチちゃん、さいっこう！やっぱ俺が

認めただけあるわー」

他の生徒たち、友彦に向かって感謝の
言葉をかける。

友彦「…良かった」

友彦、日記を取り出し、書き込む。

友彦「嫌なことは嫌だとはっきり言葉にすること。
案外何か変わるかもしれない。
よし」

○友彦の家・リビング・（夜）

友彦、帰って来る。

頼子、料理を作っている。

健太、ソファに横たわりながら漫画を

読んでいる。

友彦「ただいま」

頼子「友彦、おかえりなさい。ご飯まだか

ら、先お風呂入っちゃいなさい」

友彦「うん。わかった」

健太「ふふっ。へへへっ」

友彦M「健太はこの時こそ不真面目な奴だった
が、大学受験に失敗してから改心
し、今や銀行マンだ。失敗は成功の
もととは健太のためにある言葉だろ
うな」

頼子「ケンちゃん、漫画ばかり読んでない
で勉強しなさい。この前の試験学年ワ
ースト3だったんだから」

健太「ジョジョの最新刊読み終わったらね」

友彦M「お、ジョジョか、俺も一昨日柏木に
借りてまだ読めていないんだよな」

健太、チョコレートで汚れた手で漫画
を読んでいる。

健太「あっははっ」

友彦M「あああ、ジョジョがチョコレートま
みれに。数多のスタンド攻撃をかい
くぐったジョジョでもこの攻撃は予
想していなかっただろうに」
ソファの近くに紙袋が置いてある。

友彦「ん？この紙袋：」

× × ×

回想

教室 夕方

柏木「はい、これ。最新刊。絶対汚すなよ！」

友彦「ああ、もちろん！」

× × ×

友彦「あっ！健太、もしかしてこれ、俺の部

屋から持ってきた？」

健太「やべ」

友彦「健太！どうしてくれるんだよ！柏木に

絶対汚すなって言われたのに：」

健太「これくらいの汚れなら気付かないだろ」

友彦「誰でも気付くだろこんなに汚れてた

ら！買って返すか：しかしどこも売

り切れだし。まいったな：」

頼子「ちよつと、漫画一冊で喧嘩しないの。

今度新しいのお母さん買ったげる」

友彦「そんな簡単に買えないんだって、母さ

ん」

友彦M「あー健太！本当にむかつく！」

○同・リビング・（朝）

友彦と宗次、ダイニングテーブルで朝

食を食べている。

友彦「…父さん？昨日、俺、健太と喧嘩した」

宗次「ふーん」

友彦「俺は、全部健太が悪いと思ってて。だ

って柏木から借りた漫画…」

宗次「兄弟仲良くしなさい。父さん、会社行

くな」

友彦「…俺の言い分も、喧嘩の内容も、何も

気にならないってこと…」

宗次「何か言ったか？」

友彦「いいや、何でもない」

○学校・教室・（朝）

友彦、人が少ない教室で日記を書いている。

友彦「どうして父さんは子供の喧嘩が気にならないんだ。興味がないのか？それでも父親かよ」

× × ×

回想

2024年 友彦の家 リビング

美香「ほんつと信じらんない。もういい」

美香、自分の部屋に戻る。

由美「美香：お父さん、お父さんから美香の話聞いてあげて頂戴よ」

友彦「え？：ああ、うん、まあ、明日聞くよ」

× × ×

友彦M「ああ：俺は美香になんて態度をとっていたんだ：！これじゃ由美にも顔向けできない」

由美、隣に立っている。

由美「おはよう！」

友彦「うわぁ！」

友彦、椅子から立ち上がる。

由美「どしたの？そんなに驚いて」

友彦「いや、なんでもない」

由美「そう？あ、これ、良ければ食べて！」

由美、手に持っている紙袋を友彦に差し出す。

友彦「何これ？」

由美「この間スイーツあげたときすっごく美味しそうに食べてくれたから、また作ってきたの」

友彦M「由美、健気だ。俺は由美のこういう所を好きになったんだったな」

友彦「…あのさ、今日の放課後、時間ある？」

由美「あるけど、どうして？」

友彦「それはその時に話す。また後で会おう」

由美「うん、わかった。じゃあまたね」

○同・教室・（夕）

友彦、由美がくれたスイーツを頬張る。

友彦「うーん！やっぱり美味い。実家の味がする…いや、由美の料理だから、俺の家の味？あれ、なんて言うんだ？」

由美、教室の入り口に来る。

由美「橋田くん！」

友彦「あ、由美。す、すぐ行くから！そっちで待ってて！」

○同・廊下・（夕）

友彦と由美、向かい合っている。

友彦「スイーツありがとう。美味しかった」

由美「そっか！喜んでくれて良かった！それで、話って何？」

友彦「それは、その…（咳払いして）実は俺、ずっと前からす…」

柏木、廊下の角から現れる。

柏木「由美！」

柏木、走って向かってくる。

柏木「由美、探したよ。やっと見つけた」

友彦「柏木」

柏木「お！トモちゃんじゃん」

友彦「おう」

由美「良太、待たせてごめん」

友彦「…？」

柏木「あ、そうだ言っていなかったわけ？実は

俺たち、付き合うことになって。お

先にごめんな、トモちゃん」

友彦「へ？」

由美「それで、すって何？」

友彦「…す？」

由美「さっきの話を続きは？ずっと前からす

…？」

友彦「…スイーツのタッパー。返そうと思っ

て」

由美「ああ！それなら今度で良かったのに。

でもありがとう！」

柏木「由美！行こう！」

由美「うん」

柏木と由美、親密そうに去る。

友彦、二人の後ろ姿を呆然と見ている。

友彦M「もしや過去が変わった…？」

○川沿いの道・（夕）

友彦、土砂降りの雨の中泣きながら歩いている。

友彦 M 「そうだ。完全に失念していた。由美と俺が結婚する前、柏木と由美は付き合っていた。でもそのあと由美は柏木にこっぴどく振られて。俺は同窓会で由美に会った時に勢いで告白したんだった」

× × ×

回想

道路 夜

友彦（30）と由美（30）、向かい合っている。

友彦 「俺は、柏木みたいに由美を悲しませたり、泣かせたりしない！一生笑っていられるように、幸せにする！だから、俺と付き合ってください！」
由美、友彦に抱きつく。

× × ×

友彦「一生笑っていられるように、幸せにするんじゃないのかよ？」

○友彦の家・リビング・（夜）

健太と宗次、ダイニングテーブルに座っている。頼子、料理を運んでいる。

友彦、帰って来る。

頼子「あら、ずぶ濡れじゃない！」

友彦「うん」

頼子「タオル持ってきてあげるから座って、

ご飯食べて」

友彦M「もう、疲れた」

友彦、頼子が作った料理を食べる。

友彦M「ああ。しょっぱい」

健太、足をぶらぶらさせて友彦にぶつけてくる。

友彦M「健太、頼む、今はよしてくれ」

友彦、健太の足をわざと蹴ると、健太も対抗して足を蹴る。

友彦「あーもう我慢ならない！痛いんだよさ
つきから。」

健太「そっちが先だろ！おれ悪くないし」

友彦「は？」

頼子「足がぶつかっただけでしょ！二人とも

落ち着いて」

宗次「ごちそうさまでした」

宗次、立ち上がり部屋に戻ろうとする。

友彦「なあ：父さんは、子供の喧嘩に何の興
味も無い？母さんは毎回仲裁に入ろ
うとするけど父さんは？今だって自
分の部屋に戻ろうとしてただろ？」

宗次「それは：」

友彦「あと、父さん今日の飯どうして全部食
べ切らず席立とうとした？母さんい
つも一生懸命料理してるって知って
るだろ？」

頼子「友彦、そのことは良いから」

友彦「いいや、良くない。あと、俺が父さん
に仕事で何かあった？って聞いたと

き、大丈夫って言ってたけど、そんなわけないって俺わかってるよ！会社の嫌な上司とか仕事しない後輩とか色々あるって」

宗次「友彦：どうしてわかるんだ？」

友彦「俺も父親だから！俺も父親だからわかるんだよ！」

友彦、部屋に戻り鍵をかける。

宗次「友彦！」

○同・友彦の部屋・（夜）

友彦、椅子に座り日記を見ている。

頼子と宗次、部屋の外から声をかけている。

友彦「これって…」

× × ×

回想

1992年 学校 中庭

由美「どう、かな？」

友彦「やっぱ美味いわ。由美の料理」

タイムスリップ日記

T「由美が作る料理は美味しい。美味しい時は美味いと伝えるべし」

× × ×

回想

1992年 友彦の家 リビング

友彦「…父さん、会社で何かあった？もしかしたら相談に乗れるかもしれない」

宗次「…いや、別に何もない。大丈夫だ。」

タイムスリップ日記

T「仕事で何かあるなら言えればいいのに。言ってくれば力になれるかもしれない」

× × ×

回想

1992年 学校 教室

友彦「竹中先生！テスト三日前に範囲の変更を伝えるのはどうなんでしょうか？」

竹中「…だから、今日他の先生と話し合って、調整する」

タイムスリップ日記

T「嫌なことは嫌だとはっきり言葉にすること。案外何か変わるかもしれない」

× × ×

回想

1992年 友彦の家 リビング

宗次「ごちそうさまでした」

宗次、立ち上がり部屋に戻ろうとする。

友彦「なあ：父さんは、子供の喧嘩に何の興味も無い？」

タイムスリップ日記

T「子供が喧嘩した時は仲裁に入ってほしい」

× × ×

友彦M「これ全部、俺ができてなかったこと

だ。俺は、全部、全然、なんにもわかってなかった」

友彦「由美、歩、美香：すまん。本当に申し

訳ない。うう：会いたい。会いたい。家族に、会いたい。もう、俺疲れた」

○同・友彦の部屋・（朝）

2024年

友彦、スマホのアラーム音で目を覚ます。

友彦「はあ…6時だ。学校行かないと…」

○同・リビング・（朝）

友彦、部屋から出てくる。

由美、料理を作っている。

友彦「母さん、おはよう」

由美「お父さん、おはよう」

友彦「お父さん？」

由美が振り返り、友彦驚く。

由美「なに、お化けでも見たような顔して」

友彦「由美…！由美だよな？」

友彦、由美を抱きしめる。

由美「ちよつと、どうしちゃったの？」

美香と歩、部屋から出てくる。

美香「ふん」

歩「ふぁーあ。おあよー」

友彦「美香、歩！」

友彦、美香と歩を抱きしめて頭をなでる。

美香「お父さん、やめて！」

歩「なんだよ？お父さんうざい」

友彦「良かった。元気そうで」

由美「お父さんったら、朝から変」

友彦「だって、父さん昨日まで高校生だった

んだぞ。起きたら17歳になってて、

17歳の由美に会って、お前たちな

んかまだ生まれてなくて……」

美香「はいはい。すごい夢だねー」

歩「ふぁー。朝ごはん何？」

由美「卵焼きとトーストよ。早く食べて」

友彦「本当なのに……でも……もしかして全部

夢？」

友彦、自分の部屋に戻る。

○同・友彦の部屋・（朝）

友彦、バッグ・腕時計・服を見るがすべて現代のものになっている。

友彦「嘘だろ！」

友彦、机の上に目をやると“タイムスリップ日記”が置いてある。

友彦「あ：あつた：！俺の生きた証」

由美の声「お父さん会社！遅れるよ！」

友彦「あ、しまった、プレゼン！」

○駅・（朝）

友彦、一瞬ホームを間違えてから方向転換して逆のホームに行く。

○会社・オフィス

北村、デスクに座っている。

友彦、北村の前に立っている。

北村「準備が出来てない！？会議は1時間後だぞ！なーにやってんだよ、橋田」

友彦「申し訳ありません！」

北村「とにかく、荒削りでもなんとか資料だけ作れ。発表は原稿無しでなんとかする。ったく。これだから橋田は」

北村、わざと友彦の肩にぶつかる。

○同・会議室

幹部たちが座っており、北村と友彦も他部署の発表を聞いている。

他部署の発表が終了し、拍手が起こる。

北村と友彦、前に出る。

北村「えー、それでは我が部の戦略を発表いたします。次のスライド、頼む」

友彦、次のスライドを表示する。

北村「えーと。（咳払いして）まず、予算に関しては昨年の：1500万：ではなく、2300万の繰り越しが、んー、すみません。えーっと、予算に関しては：」

役員 1 「北村君、準備出来ていないんなら、

今の時間は無駄だ。君ができると言つたからせっかく時間を設けたのに」

北村 「ええ、もちろんです。少々お待ちくだ

さい。えー（咳払いする）」

役員 2 「私達も暇じゃないんだぞ。発表がでないなら、今日はここで帰らせてもらう」

幹部たち、続々と席を立つ。

北村 「出来ます。お待ちください、もう一度最初から説明させていただきます。必ず納得していただけますから。どうか、どうか、お願いします。お願いしますから……」

役員 1 「ご苦勞だった、北村君」

友彦と北村以外会議室を出る。

北村、友彦の目の前に来る。

北村 「よくも俺の顔に泥を塗ってくれたな？
これで晴れて当分はお気楽社員のままだ。おめでとう」

北村、出口に向かう。

友彦、手帳を見返すと“嫌なことは嫌だとはつきり言葉にすること。案外何か変わるかもしれない。”と書いてある。

友彦「…部長、お言葉ですが、発表前日に資料と原稿準備を強要するのはどうかと思います。今後はそのようなことが無いよう、謹んでお願い申し上げます」

北村「何？」

友彦「すみません、それでは、お先に失礼致します」

友彦、北村の肩にわざとぶつかる。

北村「おい、橋田！これで済むと思うなよ！
今まで俺がどれだけお前に…橋田！」
友彦、振り向かず歩く。

○同・オフィス

井上、パソコンでゲームをしている。

友彦、背後から近づく。

友彦「井上君」

井上、パソコンを急いで閉じようとするが、友彦が手で井上のパソコンを開ける。

井上「やっべ」

友彦「業務時間中は仕事に集中しよう。この間頼んでいた資料作成は就業時間までの2時間で終わるはずだから、今日中に終わらせてほしい」

井上「あゝはい。すみません」

○電車・（夜）

友彦、つり革を持って立っている。

友彦M「さすがに言い過ぎたかゝあんなこと部長に言って、当面は課長職はおろか昇給も無いだろうな…」

○友彦の家・リビング・（夜）

由美、アイロンがけをしている。

友彦、ダイニングテーブルに座っている。

友彦「いただきます」

友彦、料理を口に運ぶ。

友彦「うーん。美味しい。味付けがちょうど

良い」

友彦、日記を見ると、“由美が作る料理は美味しい。美味しい時は美味いと伝えるべし”と書いてある。

由美「いつも通り普通でしょ？」

友彦「いや、いつも通りでも普通でもない」

由美「何も変えてないのに、おかしいな」

友彦「いつだって由美が作った料理は特別で

俺の一番の好物だから」

由美「やだ、お父さんったら、突然そんなこと言わないでよ。なんだか照れるじゃない」

友彦M「うん。由美が笑っているから、俺も嬉しい」

美香、洗面所から出てくる。

美香「ドライヤーまた壊れた！まだ髪の毛乾かし終わってないのに。お父さん！今度昇給したら、高いドライヤー買ってー」

友彦「ああ。そう、だな」

歩、部屋から出てくる。

歩「ジュース、ジュース。：お父さん、顔色悪くない？どうしたの」

友彦「いや、何でも：」

歩「ふーん、そう」

友彦「：実は、お父さん、今日会社で上司にたてついた。急に仕事を任されても、困りますって。だからしばらく昇給は無いかもしれない：ドライヤーは安物でしばらく我慢してほしい。三人とも、ごめん」

由美・美香・歩「え」

美香「それはさ、急に仕事押し付けてくる上司が悪くない？全然お父さん悪くないでしょ」

歩「悩んでるなら言ってくれば良かったのに。俺は今の生活で満足してるし。てか一人でこの家支えられんの凄い。マジで」
由美「ストレス抱えて、ダメになるよりよっぽどマシ。よく言った、流石お父さん」

友彦「ごめん：ありがとう」

日記のページがめくれ、“仕事で何かあるなら言えばいいのに。言ってくれば力になれるかもしれない。”と書いてある。

○同・リビング・（朝）

友彦、部屋から出てくる。

歩、ダイニングテーブルに座っている。

美香、冷蔵庫を開ける。

美香「あれ？昨日買った野菜ジュースどこ？」

歩、野菜ジュースを飲んでおり、友彦はそれに気付く。

友彦「ん？」

美香「あ、歩！それあたしのでしょ！なんで人の勝手に飲むの！？返して！」

歩「吐き出すしかないもん。取れるなら取ってみー？」

美香は歩のお腹を攻撃して取り出そうとする。

友彦、日記をめくると“子供が喧嘩した時は仲裁に入ってほしい。”と書いてある。

友彦「美香、歩。一旦聞いてほしい。美香の野菜ジュースは俺が今日買ってくるから。あとこれからはお互い自分のものには名前を書いておくように。」

美香・歩「はい」

友彦「…それと、すまなかった。今まで二人に氣を使ってやれてなくて」

歩「お父さんが喧嘩に口出すなんて珍しい」

美香「あたしもそれ思った。急にどうしちゃったのお父さん」

友彦「…俺も父親だから。お前たちの父親だから、幸せになってほしい。笑顔になつてほしいって思うんだ」

由美、洗面所から出てくる。

由美「みんな揃ってどうかした？」

友彦「よし、それじゃあ今度、沖縄にでも旅行行くか！お父さん頑張るから、ぱーっとお金使おう！」

美香「何その思いつき、意味わかんない」

由美「旅行もいいけど、学校と会社遅れるわよ？」

友彦「いっけね」

美香「あと5分しかないじゃん！」

友彦・由美・美香・歩、忙しそうに準備をする。

日記には“49歳の俺へ、がんばれ。17歳の俺より”と書いてある。

おしまい